
－恋する少女の行方－

みちかこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一恋する少女の行方一

【Nコード】

N7070Q

【作者名】

みちかこ

【あらすじ】

男子禁制の花園に一人の少年が迷い込む――。

鳥籠の中の少女たち

好きな人がいるとしたら、きっとそれは前世の自分なんだろう。だってもう私は、“恋”なんてできないのだから。

私には、好きな人がいた。

その人はとても美しいともいえない。ただ普通のそこらにいなような人間。

それなのに私は、その人を好きになった。私の目には、この世とは思えないほど美しいものに見えたから。

他の人にはきつと分らないだろう。私の瞳に映る彼の美しい姿を。

第一話 鳥籠の中の少女たち

「おはよう」

「えっ!？」 「わあ!」 「きゃあ!！」

彼女たちは男子に声なんてかけられたことのないのだろう。

どう接すればいいのか分からず、ただ奇声を上げるだけ。

「やだ、おはようですって!」

「ちよっと。何か言ったらどうなの?」

「いやよ、怖いわ。あなたが言ったらどうなのよ」

3階建ての古びた校舎にはぎっしりと人が埋め尽くされている。

どうやら“男”というものを知らないらしい。物珍しそうに僕を見ている。

「近寄ってはダメよ。春妃、夏稀、秋羅」

校舎の入り口から、声が。

「「「申し訳ございません、お姉さま」」」

急に志雄らしく頭を下げる三人の少女。

（一体、彼女は……？）

振り返るとすぐ後ろに女は立っていた。

「!？」

「驚かなくても宜しくてよ」

女は微笑しながら、僕の頬をなでる。とても愛おしそうに。

「……あなたが、四季？」

「はい、そうですが…」

「そう。…だと思いましたわ」

「ということは、もしかしてあなたが……」

「ええそう。わたくしです。冬華。……あなたの妹ですわ」

「やはり……」

「「!？」」

学園内がざわめきだす。

どうやら、何も知らされていなかったようだ。

つい先日、僕の両親が亡くなった。

身寄りのなくなった僕は、実の産みの母である“雅 壱帆”の元へ。そう、僕は壱帆さんに捨てられたのだ。そして今まで育ててくれた両親は本当の親ではなかった。

どうやら捨てたのにも理由があるらしい。代々“雅家”ではそういった風習があるというのだ。

本当なら、産まれてすぐ殺されてしまうという。

産みの母、壱帆はそれができなかったのだろう。

ここにいる冬華にもその話を聞いたから、嘘ではない。

僕は、もう一度壱帆さんの子供になろうと決意し、ここへやってきたのだ。

それなのに……

「どういことですか、冬華さん」

「嫌ね。冬華とお呼びなさいな、四季お兄様」

「では、どういことですか、冬華」

「なんのことかしら」

「先ほど、彼女たちに『僕に近寄るな』などと……」

「そういうことすの」

「僕はまだ雅家にとっては穢れた人間という事すか」

「あら、実際はそうすわ。ですが、わたくしはそういう意味で言つたわけではございせん」

「では……」

「…その話は後ほどゆっくり話されましよう？」

「なぜ？」

「…ここでは、皆に聞かれてしまいますわ」

「…あ」

ヒソヒソ、

ヒソヒソ、……

校舎から見物している女の子がクスクス笑いながら、こちらを見ている。

僕たちが話すと隣の子へ耳打ちをし、また笑い出すのだ。

「なんです、あの子は…。気味の悪い」

「あの子は、“#08437・神島みこ”ですわ」

「なんばーまるはちよんさ…ん？」

「それは番号。名前はその後と言った、神島みこ」

「かしま、みこ……」

「彼女は要注意人物よ。耳がいいの。わたくしたちの話、あの校舎まで届くと思うかしら？」

「いえ、せめて一階までならば……」

「みこさんが居るのは3階ね。普通ならわたくしたちの会話は聞けない。でも、彼女は違うのよ」

「能力者、ですか？」

「ここ、雅学園には、かなりのクセダマが多くて、生徒会長のわたくしでもいませんの」

「…まだ、他にも居るんですね」

「ええ。……みこさん、聞こえていらっしやるでしょう？こちらへいらっしやい」

本当に聞こえているようだ。首を左右にブンブン振っている。やはり、男に会いたくない…のだろうか。

「あの子、人見知りする子なの」

「いや、僕が男だからですよ」

「……………」

「冬華……？」

「桐野えりあ！！聞してる！？」

「！？Σ（・ω・ノ）ノ」

「ハイッ！！聞こえております！！冬華さま！！」

「えりあさん、神島みこさんをわたくしの元へ連れて参りなさい！」

「イエッサー！！」

「一体何を…？」

「まあ、見ていなさいな。面白い子ばかりなんだから、雅学園という場所は…」

「…！？」

何が起こったというのだろうか。

桐野えりあという子が腕を一振り。すると、神島みこという子がふわりと宙に浮くのだ。

「え、えっ…?」

「#04546・桐野えりあ。彼女は“モノ”を移動させる事ができるの。自由にね」

「すごい……」

「あら、いらっしやい。みこさん」

「い、いらっしやいじゃないわ、冬華さん…」

「みこさんったら。…今日も今日とて美しいのね。うっとり致しますわ」

「いやですわ、冬華さん。そ、そんなこと言ってすぐにおちたりする私ではありませんわ…」

「あら、そんなおつもりで言ったわけではなくってよ?」

「え、あっ!…うう…」

いや、これはおちてる(笑)

「それでは、みこさん。わたくしの兄、四季お兄様にご挨拶を……」

「……」

「みこさん?」

「あんたが冬華さんのお兄さんだなんて許さないわ!!」

「はあ…?」

「冬華さんのお兄様はこの私!!」

「へっ、おにい…?」

「あら、ごめんあそばせ。この方、性同一性障害者なの」

「からだは女。心は男よ」

「それにしては、ずいぶん女性らしい…」

「そういうしつけをずっとされてきたのだから仕方ないでしょう!」

？自分でも正直男か女か分からなくなるもの！」

「はあ、そうなんですか…。失礼しました…」

「くすくす。きっとあなたたち、仲良くなれるわ」

「なっ！なんですって、冬華さん！？」

「だって、お二人とも、男性なのでしょ？」

「ああ、そうですね。よろしくたのむぜ、兄弟！」

「誰が兄弟よ！このバカッ！！」

「ウボァッ！！」

殴られる俺。

こいつの腕力ハンパねえ…！！

「四季、まだまだいるのよ。私のもう一人お気に入りの子がね」

「はあ、どなたでしょうか」

「あの子よ。二階にいらっしゃる…。えりあさん、お願いします」

「了解いたしましたッ！」

もう一振り。

風のように僕の元へやってくる。

「わわっ！…っとと！」

地面に着地するなり、バランスを崩しそうになる。それをそつと支えた。

「ご、ごめんなさい…」

「いえ、…大丈夫ですか？」

「はい。あの…初めまして、#26381・水畑 苺と申します…」

「あ、こちらこそ初めまして。雅 四季といいます」

「やはり、雅姉妹とそっくりなのですね」

「そうですね。離れてはいましたが、兄妹ではありますからね」

その子は、まるで天使のような子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7070q/>

－恋する少女の行方－

2011年10月5日11時39分発行